

自撰年譜抄 (一九〇四—六七年)

石田龍次郎

一九〇四年 (明治三七年)

一月四日生。石川県能美郡小松町 (現、小松市) 字八日市町六番地、酒類販売商、妻谷太兵衛、よの六男。

一九一〇年 (明治四三年)

石川県能美郡小松町、芦城尋常高等小学校に入る。小学校在学中、兄三人は中学校・小学校において、つねに最優等の成績で毎年、賞状を受けていたが、じぶんは一度もそういうことのない成績であった。

一九一七年 (大正六年)

芦城小学校高等科一年修了後、石川県立小松中学校に入学。

一九一九年 (大正八年)

七月、兄二人、従兄一人と白山に登る。徒歩六日、はじめての旅行であり二千メートル以上の登高であった。

一九二一年 (大正一〇年)

小松中学校、第四学年終了。第四高等学校理科甲類に入学。はじめて両親の元をはなれて金沢に住む。最初の二年間、校内の時習寮で、文科理科を問わず全国各地の学生と生活する。導入されたばかりのスキーと、山砲聯隊における馬術。

一九二二年 (大正一一年)

八月、富山県城端町より白川郷を通り、飛騨高山町を経て、上高地に出、島々までひとりで徒歩旅行。

一九二四年 (大正一三年)

第四高等学校卒業。東京帝国大学理学部地理学科に入学。当時の地理学教室の学生総数一人。山崎直方教授、辻村太郎助教授、多田文男助手の指導を受ける。小石川の伝通院裏、明倫学館に寮生活二年間。加越能を郷里とする各種多数の学校に在学する学生、無刀流の剣道。

一九二五年 (大正一四年)

三月、日本地理学会が創立され、東大地理学教室から『地理

学評論』創刊。学生として編集事務の手伝をし、資料・雑報等をかきはじめ。

一九二六年（大正一五年）

三月より約一か月、台湾に旅行。

十一月、第三回汎太平洋学術会議が東京に開かれ、外国人の助手をはじめて国際会議を傍聴する。

一九二七年（昭和二年）

三月、東京帝国大学卒業。卒業論文「Fragments on Economic Geography of Formosa。」

四月、石田姓を継ぐ。留学中の佐藤弘教授の代りをしていた田中薫氏が神戸高商に転ずることになったので、留守中という了解で東京商科大学予科講師となり、三回の講義を週二日にする。年報酬八百円。

九月、自由学園において実験的な授業を行なう（一九四一年まで断続的に）。

一九二八年（昭和三年）

四月より東京女子大学高等学部にも講師として週一回の講義をする（一九四一年まで）。当時は意識しなかったが、信念に忠恕、合理、反俗の精神について、安井哲、羽仁もと子両先生の感化を受けたこと、後年、敗戦後に多少、行政的事務にたずさわって知った。

一九二九年（昭和四年）

年頭より病床におられた山崎直方先生、七月逝去。師の縁うすく、爾来、むしろ地理学以外の先輩・同僚、また地理学界の若い友人を研究上の手懸りとして今日にいたる。

八月、小笠原島・硫黄島に旅行。

十一月、日本大学高等師範部（夜間）の地理学科に講義を行なう（一九三一年まで）。

一九三〇年（昭和五年）

五月、日本地理学会の組織がとこのい評議員となる（一九六四年まで）。えらばれて常務評議員（定員五名）となり、毎月『地理学評論』の編集と会務に参画する（一九三四年まで）。

岡山俊雄君とともに『山崎直方博士論文集』の編纂に従い、十二月、上巻が古今書院から出版された（下巻は翌年五月）。

一九三一年（昭和六年）

このあたりより文部省において郷土教育・郷土研究がさかんに唱導され、刀江書院主、尾高豊作氏と在野的立場において、休暇に地方の県教育会などの講習会に出る（約三年間）。しかしこの運動も満州事変の進行とともに立ち消えとなった。

小石川区の新渡戸博士邸において、時折開かれた「郷土会」に小田内通敏氏の紹介で出席して、各界の学者から地方の話を書いたのも、この一兩年であった。

一九三二年 (昭和七年)

前年より嘱を受けて花井重次君と山崎先生の蔵書・別刷類等を分類整理し、五月より山崎書庫として毎週一回開館、管理。(一九三八—三九年)ごろまで続いたが、利用者は必ずしも多くなかった。同文庫は一九五九年、東大地理学教室に納入。

一九三三年 (昭和八年)

一月、『山崎書庫蔵書目録』発行。

地理学における法則、自然環境の解釈等について藤原咲平、今村学郎両氏の *social physics* や数量景観派と論争。ただし十分に学界の発展には役立たなかった。

このころから明治前半の日本地理・統計・教科書類をあつめはじめ、古書展にはほとんど欠かさず早朝出かけた。

一九三四年 (昭和九年)

四月、東京商科大学予科教授となり、兼ねて学生主事事務取扱(予科担当)を命ぜられる。予科生徒の生活を知ろうと、いわゆる思想善導費を使って一年間、毎週、学生数人ずつを招いて昼食を共にしたり、学生生活調査を企画実施したりしたが、願みて至らないことばかり。

七月より約四週間、北海道、樺太へはじめての大学よりの出張旅費による調査旅行。しかしその後も調査旅費は大い自費であり、戦後になって文部省科学研究費によることもあった。

一九三五年 (昭和一〇年)

五月、予科生徒、記念祭のあと多摩湖電車を運転不能とさせ、進退伺を出す。七月、生徒ら検事局より不起訴と決定し、願により学生主事事務取扱を免ぜられる。

東京地学協会『地学雑誌』の編集委員となり、毎月一回、編集会議に出た。井上禧之助・岡田武松両副会長に時折、所見をのべたが、会の歴史的な性格上、地質学の色彩が強いかんともしがたかった(一九四二年まで)。

一九三六年 (昭和一一一)

前年の白票事件のあとを受け、付属商学専門部講師となり、はじめて経済地理を講義する(一年間)。

一九三七年 (昭和一二)

四月、飯本信之氏の留学により、東京女子高等師範学校講師となり、各地域ごとの課題的な日本地誌を講ずる(翌年末まで)。またその不在を補って再び日本大学高等師範部で講義をする(一九四二年七月まで)。

日本の産業革命期を境とする地理的変貌に興味をもち、この年より毎年、春秋の日本地理学会大会で報告する(一九四二年まで)。

八月上旬、前年より委員として関与していた第七回世界教育会議が東大において開かれ、地理教育部会ではじめて英語の論

文を読む。“Redistribution of population and growth of cities in Japan since the Meiji Restoration, 1868.”

八月一日より一か月、日本学術協会主催の満州大会に出席。大連よりハルビンまで。帰途、朝鮮による。はじめて大陸の異民族の生活をみる。

一九三八年 (昭和十三年)

四月、再びえらばれて日本地理学会常務評議員(定員一名)となる。

一九三九年 (昭和十四年)

春、『世界地理』全二六巻の責任編集を河出書房より依頼され、武見芳二・渡辺光両氏をいざない企画し、一月第一回配本。原稿内容について執筆者と接衝したり、毎巻の挿込月報や統計集を執筆。(一九四一年七月完了。執筆者数、約七〇名)。日本の地理学界の若い世代で担当したこと、量的には最大最詳の世界地理であったが、地誌学に対する研究態度の不定が目立った。

一九四〇年 (昭和十五年)

七月、東京商大太平洋クラブの指導教官として朝鮮・満州に行く。京城に学生一八名を迎え、北鮮より牡丹江、佳木斯に出て松花江を溯り、ハルビンより大連まで二三日間。終ってひとりで吉林省樺甸県に東京府開拓団の向陽村を訪う。駅より小銃

を肩にした団員二人と夜半まで乗馬一〇里を駆ける。

八月二三日より満地学関係諸学会連合大会(大連および新京)に出席。終ってハイラル・マンチュリーに巡検旅行。九月六日、ハルビンで解散。京城を経て九月一日帰京。

一九四一年 (昭和十六年)

四月、再び附属商学専門部講師となり、また中央大学商学部で経済地理を講ずる(翌年夏まで)。

十一月、『資源経済地理、食料部門を』中興館より出版。同僚ドイツ文学の神保謙吾氏の翻訳原文を日本向きに換骨奪胎したものが、日本出版文化協会の推薦図書となり版を重ねた(翌年九月出版の『同、原料部門』も同じ)。

雑誌の統制のため大正末以来の『地理教育』、また次いで出た『地理研究』も廃刊。行きがかり上、多田文男、綿貫勇彦氏らと日本地誌学会をおこしたが、当時のじぶんの興味は、在来の地誌研究にはなかった。

一九四二年 (昭和十七年)

一月より新雑誌『地理学研究』(日本地誌学会編、中興館刊)出て、創刊号より六月号まで編集。巻頭言および編集後記「土羊寸信」を書く。

前年末、大東亜戦争起り、四月、陸地測量部の南方地名調査委員、六月、文部省の外国地名人名の呼称等に関する調査委員を嘱託され、おのおの会議で地理学者としての意見を述べ、決

定に参与した。ほかに文部省資源科学研究所の東亜地理学文献目録編纂委員(六月)、昇格による文部省師範学校地理学教科書編纂委員(八月)を命ぜられたが、実質的な仕事に入らず、一二月願によりすべて免ぜられる。

八月、東京商大より軍の南方調査機関に参加することになり、その一員となつて準備。地理(気候風土)調査のため戦時職務として予科教授の身分のまま、南方軍政総監部調査部付となり、赤松要教授を調査団長として約四〇名とともに、一月一七日神戸出港、二八日昭南(シンガポール)上陸。敗戦まで滞在。(拙著、『研究法入門』「南方調査機関の反省」)。

一九四三年(昭和一八年)

三月、調査のためバンコクに行き、帰路はマライを南下して博物館その他の調査研究機関を調べる。

九月、ジャワ軍政監部調査部における農村実態調査(上野福男・水田洋氏ら担当)の状況視察のため約二週間出張。

十一月、南方地域における調査研究機関の成果を利用する企画をたて南方科学委員会を発足させる。南科委という文書記号で各軍各部隊よりの自然科学的質問を処理する。しかしその要求の半分は、欠乏物資の代替物に関するものであった。

一九四四年(昭和一九年)

四月、戦局の推移とともに調査はほとんど行なわれず、赤松教授を長とする本隊はマライ軍政監部(クアラランブル)に

移り、小田橋貞寿氏と二人のみ昭南に残る。

九月より約一か月、山田秀雄、大野精三郎、宇津木正らの諸君を助手としてマライ、ベルリス州クリアン郡の米作地の実態調査を行なう。帰途、クアラランブルの調査部会で報告し、後、約一か月回虫駆除のため同地の陸軍病院に入院。

一九四五年(昭和二〇年)

三月、マライ、ネグリスミランの週市の実態調査を行なう(山田・大野・宇津木の諸君)。七月より回虫のため陸軍病院に入院。八月一五日、敗戦をきき頭髪を一分に刈つて退院。九月より総司令部はジョホール州レンガムのゴム林にうつり、一月、赤道直下のレンバン島に移つて自活。軍政総監部総務部総務班の先任者。

一九四六年(昭和二一年)

レンバン島より帰還第一船、もと駆逐艦神風にのり二月二二日浦賀上陸。復員、従軍解除。帰郷。一兩日後、新田切換え、困窮。

五月、上京。講義のないまま反省のため大正末期以後の地理学会の諸雑誌を読みかえしつつメモをとる(秋まで)。

十一月、文部省の依頼により、新たに発足する新制高等学校用の人文地理の教科書の編集に着手。今まで教科書というものに全然、関係したことがなかったので別技篤彦・新井浩氏らに参加を乞う。

一九四七年（昭和二年）

新しい教科書は急を要したので、大体、戦前の商大予科の講義案を骨子としたが、一節を書きおえるごとに英訳して、占領軍民間情報局の検閲を受けねばならなかった。人文地理委員会の名で発行、上巻だけ新学期の間にあわせたが、いわゆる一種検定本で国定と同じく二年間、全国の新発足の高等学校で使われた（秋に下巻発行）。

その内容・編成は明治以来の並列的地誌を根本的に変革したものであったが、新制高校に理解がなかったため、同時に編集した高校社会科（人文地理）指導要領案とともに、その後の日本の地理教育に誤を犯したかも知れぬ（この教科書はその後改訂を加えながら一九六二年まで中教出版、実業之日本社等で発行された。）（拙著、『円卓会談』「占領下の人文地理編集」）  
四月より東京商科大学予科の講義をはじめ。

一九四八年（昭和三年）

四月、文部省人文科学委員会委員（二年間）。人文科学・社会科学の既成の体系のなかに境界領域の科学としての地理学が問題となったが力たらず。

四月、新たに発足した文部省通信教育委員会委員となったが、後には員に備わるだけ（一九五四年まで）。

学界刷新の気風が起り、日本地理学界でも規則改正の議があり、九月、全員の投票により常務評議員（定員二名）にえら

ばれ、爾来、再び会務に長く参与する。

十一月、再び『地学雑誌』の編集委員となる。（一九五〇年まで）。

秋、アメリカ合衆国より人文科学顧問団来日。日本の地理学の現状を報告。後にトレローサ教授がそれを中心として国務省に報告。

毎日新聞社より『新しい日本と世界—地理・歴史・経済』全六巻の責任編集者となり、各方面四〇人の執筆協力を得て出版（一九五〇年完了）。いわゆる中等学校の社会科地理の参考書ではなく、社会人への新しい地理を意図したが果されない部分が多かった（拙著『研究法入門』「この地理的なるもの—編集者余録」）。

日本出版文化協会文化委員として図書の推薦をする（二年間）。

一九四九年（昭和二年）

新制大学発足。五月三十一日付、一橋大学教授、社会学部所属。村松恒一郎前期部長の下に、高橋泰藏・町田實秀・久武雅夫・山田和男諸教授とともに、前期（一般教育課程）の運営にあたり、いつとはなしに組織ができて学務委員長という地位につく（一九五一年三月まで）。

五月、東京経済大学講師（一年間）。

六月、文部省科学研究費等審議会委員（二年間、その後も一九五四—五五両年度、一九五八—五九両年度。その他の年は学

会の研究費配分協力委員となる。一九六三年まで)。また同月、文部省中等教育課程社会科部会臨時委員となり、指導要領の制定について審議(一九五四年まで)。

一九五〇年 (昭和二十五年)

四月、日本地理学会の新会則による第一次常任委員会委員(定員四名、後五名)となり、以後、第四次まで連続八か年。毎月の例会および委員会にはほとんど欠かさず出席。

一九五一年 (昭和二十六年)

二月、大学基準協会の一般教育カリキュラム研究委員会委員となり、新制大学における一般教育(いわゆる教養課程)について勉強(一九五四年まで)。

四月より社会学部専門課程の講義はじまる。

河出書房より『世界地理大系』(全七巻)を渡辺光氏と編集。資料も入手しがたく、戦前版の改訂簡略版に終った。六月第一回配本(一九五三年完了)。

一九五二年 (昭和二十七年)

四月、一橋大学評議員(翌年三月まで)。

毎日新聞社より毎日ライブラリー『自然と人生』編集出版。数年間、前期部人文地理の講義のテキストとした。

一九五三年 (昭和二十八年)

NHKラジオ教養大学講座で連続放送(一一三月)。  
四月より大学院の講義「環境と社会の文化」はじまる(以後だいたい隔年に)。

一九五四年 (昭和二十九年)

一月、前年より河出書房・座右宝刊行会の『世界写真地理全集』(全九巻)を林健太郎(歴史)・富永惣一(美術)・石田(地理)の編集にて刊行(翌年七月完了)。

四月、日本地理学会、第三次常任委員会の委員長にえらばれ、二か年間、学会の運営を掌理する。各種の研究委員会を発足させ、臨時刊行物を数種発行した。(拙著、『地理学の社会化』「委員長長落第記——学会の行政」)

四月、日本学術会議の地理学研究連絡委員会委員となる(一九五六年より幹事、一九六五年まで)。

一九五五年 (昭和三十年)

日本において地理学の国際会議を開くか否かについて地理学研究連絡委員会で論議を続けていたが、一二月開催とさめる。

一九五六年 (昭和三十一年)

一月、矢沢大二氏の助力を得て、『日本地理学会編年史草稿』(一九二五—五五年)をつくる。

四月、日本地理学会第四次常任委員会で、編集担当の常任委員となり、二年間、『地理学評論』の編集を主管する。A5版

よりB4版へ。

七月、日本において国際地理学会議を開くことが閣議で決定され、ただちに実行計画を練り、一〇月、国際地理学会議組織委員会発足。幹事の一人として国内諸関係の実行委員長となり、翌年八月まで多忙を極める。

河出書房より多田文男氏と『現代地理講座』を編集。課題的ではあるが、発行社の経営上、編集の時間的余裕なく、手軽な約八〇の論文の集積で終った(八巻の予定のところ、出版社の倒産により最終巻を残して翌年終了)。

一九五七年 (昭和三二年)

一月、文部省学術用語分科審議会、地理学用語専門委員となり、飯本信之主査の下で今日まで一〇年間五〇回の委員会が開かれたがいまだに成案を得ない。

四月より東京大学理学部(地理学科)講師(一九六五年三月まで)。

五月より武蔵野市町名改正委員会委員となり、審議に参加。市政・市会議員の考え方をのぞく。五年間を費してついに決定せず。

八月二十九日より九月三日まで、東京と天理においてIGD Regional Conference in Japan, 1957が開かれる。参加者外国人八二、日本人約四〇〇。前後に五—一〇日の現地討議班五つを行なう(拙著、『地理学の社会化』「八十二人のお客様——国際地理学会議の生熊」)。

一九五八年 (昭和三三年)

二月、外国教科書の誤を訂正する財団法人、国際教育情報センター発足。春ごろから月二—四回教科書を見に行き、著者、出版社に所見を送って今日にいたる。

三月、アジアの社会経済(後、アフリカを加える)の研究を文部省科学研究費で行なう審査委員となり、地理学を一分野とし、全学界の共通利用の構想で、立教大学に研究施設をおく。毎年研究費を受けて図書を充実させる(一九六六年三月まで)。

七月、金沢大学法文学部(史学・地理学)で集中講義。

古今書院より矢沢大二・入江敏夫両氏の援助で『世界地理』(全九巻)編集企画。一二月第一回配本(一九六六年第八回配本)。執筆にあたって共同討議を行なうという方式は実行されなかった。

この年より代表者となって科学研究費を受け、工業化の地理学を松田孝・村田喜代治・奥田義雄・風巻孝・板倉勝高・和田明子その他の諸君と研究。研究会を定期的に開くとともに、各地の工業地帯を見学討議をくりかえす。個々の論文は多数発表されたが、指導力の不足のため、全体的なまとめには至らなかった(一九六三年まで)。

一九五九年 (昭和三四四年)

前年より矢沢大二氏らの補佐を受けながら編集していた国際地理学会議のプロシーディングス五月完成。

一橋大学後援会より八〇万円の援助を受けて、五月五日出発  
日本学術会議代表の一人として、ベルリンにおけるフンボルト  
百年祭祝典と第三二回ドイツ地理学会大会に出席。終ってドイ  
ツ国内、オーストリア・チロール地方、イギリス国内をひとり  
旅行する。大学より前期部長に推薦されたという報知を受け八  
月二五日帰国。留守中、日本学術会議会員候補者に推薦され  
たが、意識して選挙公報に所見を出さなかった。

九月、一橋大学前期部長就任（小平分校主事、規程により評  
議員となる）。二年間、小泉明教授を委員長として学務委員  
会を組織し運営する。

一九六〇年（昭和三五年）

四月、日本における新制大学のあり方から考えて、一橋大学  
前期制度検討委員会発足。

七月、富山大学教育学部（地理学）講師として集中講義。

二年前から工業化研究で農村工業に興味を持ち、各地を調査  
していたが、九月、石川県経済部の委嘱で能登上布産地の企業  
診断。

一九六一年（昭和三十六年）

一月、検討委員会を改組して、前期制度委員会を全学的につ  
くり、七月、委員長報告書を提出。

七月、一橋大学前期部長任期満了。

八月、翌年度よりはじまるNHK・TVの学校放送「高校の

人文地理」の番組編成委員となり、各学期の企画に参加する  
（一九六四年まで）。

一九六二年（昭和三七七）

アジア財団の旅費援助により、三月二日出発、クアラルン  
プールにおいて開かれた東南アジア地理学者会議に出席。経済  
地理と地理教育の部会で、「Geographical problems of Asian  
industrialization」と「Materials and treatment of Japan  
in foreign text books」の二つを読む。終ってマライ東海岸  
と東南部のバス旅行に参加。帰途、台湾に寄り四月二二日帰  
国。

立教大学文学部に地理学専攻コース創設につき、五月より講  
師として週一回出講（一九六四年七月まで）。

一九六三年（昭和三八八）

九月、数年来、余暇に国際教育情報センターで調べていた外  
国地理教科書に関する『虚像のニッポン』出版。新聞、雑誌、  
放送等で多数紹介されたが、多くは興味本位であって地理学  
界や地理教育の問題としてはとりあげられなかった。

一九六四年（昭和三九）

三月東大退職、七月立教退職。一橋大学に専念。

七月七日出発、ロンドンの第二〇回国際地理学会議に出席。

経済地理学会の座長をいとめる。「Changes of distribution

of salt-works in Japan”を読む。会議後、中部・北部イングランドの研究旅行に参加し、終ってドイツ、ミュンスタールで日独地理学共同研究に一週間参加、ルール地域を歩き、その後、デンマークに一週間、合衆国に四週間いて九月二六日帰国。

一九六五年（昭和四〇年）

四月、一橋大学社会学部の担当科目名が文部省令により社会学と改められ、国立大学において最初唯一の講座名となる。日本の地理学の新分野につき思うこと多けれども非力を嘆ずるのみ。

一九六六年（昭和四一年）

三月、竹内啓二君を社会地理学の講座に同僚として迎える（専任講師）。  
四月、全会員の選挙により日本地理学会々長に就任（任期二年）。総会における会長演説「日本における地誌の伝統とその思想的背景」。

一九六七年（昭和四二年）

一月をもって満六三歳に達したので、一橋大学停年制規定に基づき願により三月三十一日付、一橋大学教授退職。予科講師以来、満四〇年。教育においても研究においても、不熟未完成のことのみにて悔恨多し。

四月、一橋大学名誉教授の称号を与えられる。人を教えず、素養の譏をくりかえさず、未完の業をつづけるつもりである。